國學院大學學術情報リポジトリ

王朝文学における月末の細月考：幻想の時の表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 菜穂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000851

王朝文学における月末の細月考

— 幻想の時の表現 —

斎藤 菜穂子

キーワード

有明月 月末の細月 王朝文学 非日常的世界 幻想的世界

一、はじめに

明治五年十二月三日をもって明治六年（一八七三）一月一日とした太陽暦の採用以前、日本では月の運行を主としてそれに修正を加えた太陰太陽暦が用いられていた。満ち欠けする月でおおよその日付が分かり、月の形と位置からは時刻も把握できて、十分な灯りのない時代に天空に架かる月の形が人々に与えた影響は大きかったと思われる。

隈なく明るい満月や夕方に西へ傾く弓張り月などの月の諸相のなかでも、有明月は古典文学において恋人との別れの切なさを象徴する景物で、「有明のつれなく見えし別れより暁ばかりうきものはなし」（『古今和歌集』恋歌三・六二五・壬生忠岑）などを代表として多彩に描かれてきた。有明月は一般に暁から朝方の月全般を指し、満月の形に近い十八日頃の欠け始めから月末の細い月までを広く称する。

本稿では、従来とりたてて目を向けられてこなかった、有明月のなかでも月末近くの細い三日月の描写に注視する。この月は明け方近くに上り、まもなくの日の出によって薄らぎ天空に消えてゆき、日常生活で目にするものではない。たまさか出会ったその月は、後述する『蜻蛉日記』の石山詣でにおける繊細な風景描写のように、印象的なものとして感受されたのだった。本稿ではその美意識のありようを探るべく、細い月を描写する意味やその心性を、後世に美的感性の規範となった王朝時代の文学作品によって考察していく。月末の細

い月は、有明月一般には収まらない、時の推移を示しつつ幻想空間を演出する機能を持ったモチーフだと言えそうだ。「三日月」は一般的に月初めの細い月を表すので、誤解を避けるためこなれない表現ではあるが、本稿では「細月」という語を用いる。

二、『蜻蛉日記』における月末の細月

和歌において月末の細月を詠む例は、後に引用するが『散木奇歌集』以降に散見されるようになる。散文作品にはそれに遡る月末月の表現が確認され、平安末期頃からの和歌の用例は先行する平安散文学の美意識の影響を受けていることが考えられるので、王朝文学の規範となった、十一世紀頃までに成立した散文作品から検討してゆく。

『蜻蛉日記』の石山詣で(中巻・天禄元年七月)に、月末の細月が照らす景が描かれる。夫の来訪が途絶えがちで鬱情が募り、気分転換を兼ねての参詣だった。

I: : 片崖に木ども生ひこりて、いと木暗がりたる、^a 二十日月、夜更けていと明くなれど、木陰にもりて、ところどころに來しかたぞ見^bえわたりたる。見^cおろしたれば、麓にある泉は、鏡のごと見^dえたり。高欄におしかかりて、とばかりま^eもりゐたれば、片崖に、草の中に、...

^b 明けぬといふなれば、やがて御堂より下りぬ。^c まだいと暗けれど、^d 湖の上白く見^eえわたりて、さいふいふ、人二十人ばかりあるを、乗らむとする舟の差掛のかたへばかりに見^fくだされたるぞ、いとあはれにあやしき。御灯明たてまつらせし僧の見送るとて岸に立てるに、たださし出でにさし出でつれば、いと心細げにて立てるを見^gやれば、かれは目なれにたらむところに、悲しくやとまりて思ふらむとぞ見^hる。をのことも、「いま来年の七月まゐらむよ」と呼ばひたれば、「さなり」と答へて、ⁱ 遠くなるままに影のごと見^jえたるもいと悲し。

空を見^kれば、^g 月はいと細くて、^h 影は湖の面にうつりてあり。ⁱ 風うち吹きて湖の面いと騒がしう、さらさらと騒ぎたり。^j 若さをのことも「声細やかにて、面瘦せにたる」といふ歌をうたひ出でたるを聞くにも、^k つぶつぶと涙ぞ落つる。いかが崎、山吹の崎などいふところど見^lやりて、葦の中より漕ぎゆく。まだものたしかにも見^mえぬほどに、ⁿ 遥かなる楫の音して、心細くうたひ

来る舟あり。

(二〇六頁)

引用箇所の前、道綱母が「明けぬらむと思ふほど」に徒歩で石山寺へ向かう時に、「有明の月はいと明」るかった。前月の唐崎祓えには、「二十余日になりぬるこち」に「寅の時ばかりに出で立つに、月いと明し」と見えて、旅立ちにおいては未明の出立から日の出まで道を照らす月光が必要だったことが分かる。

石山寺に到着した夜に a 「二十日月」の光に照らされる景を眺望して、二晩過ごし霊夢も得て帰京する出立時に g 「月はいと細くて」とあるが不審だ。寺に着いた夜が「二十日」なら、これは二十一日から二十二日にかけての月だが、その月は半月ほどで「いと細」くはない。この矛盾については『源氏物語』と『とはすがたり』の例が参考になる。前者は「藤裏葉巻」で「四月朔日ごろ」の右大臣家の藤花の宴が「七日の夕月夜」とされる例である。後者は「巻二」に「卯月の末つ方」・「月いと明くさし出でたる」とある箇所、「末つ方」を月末の月とすると上がってくるのは夜明け近くで、直後に描写される「寺々の初夜の鐘、ただ今うちつづきたる」(初夜は現在の午後八時から九時頃)と非合理的なため、この「末つ方」は月の後半(十六、七日頃)と解される。^①このように区切りの良い日付表現にはある程度の幅が含まれており、従って『蜻蛉日記』の当該「二十日月」も、「二十日」の夜の月を限定的に指すのではなく下旬の月を表すとみられる。ここは前月の唐崎祓えの「二十余日」と同じ二十四日か二十五日頃と考えられ、すると月は「細」いと感じられる形である。

b からは寺に二夜を過ごしての帰途となる。この石山詣での記事では、誰かが b 「明けぬ」と言ったが c 「まだいと暗」く、続く d 「湖の上白く見えわたりて」の情景は日の光が照らすものではない。右の引用部よりも後に「ほのほのと明けゆく」と描かれるのだ。ここは月光が照らすのであり、岸に立つ僧について e 「いと心細げにて立てるを見やれば」・ f 「遠くなるままに影のごと見えたる」と目視するのも、直後の g ・ h 「月はいと細くて、影は湖の面にうつりてあり」との月光による。へものわずかな f 「影」(形)のように見える僧の姿は、湖面に映る細い月のへわずかな h 「影」(光)と響き合い、寺の清らかさを纏う僧と細月とが重ね合わされて、聖性に満ちた情景が描出されている。続いての i 「風うち吹きて湖の面いと騒がしう、さらさらと騒ぎたり」は、その光が照らす湖面の波立ちを描き取る。これは前月の唐崎祓えの「風うち吹きつつ波高くなる」と同様の景で、霊威籠もる地の聖なるエネルギーの描写であり、吉祥と解される。石山寺からの帰路なので仏教的イメージの影響も思われるが、平安仏教において影響力を有していた月は密教の観法の「月輪観」^②でそれは満月であり、またこの頃までの王朝文学において仏教的思想によって水に映る月を表現するのは一般的ではなかった。^③当該

部ではこの景を仏法の顕現としては書いておらず、本源的な神々しきとでも言えるような幻想的な情景として描出していることに注意したい。

またg「月はいと細くて」は、直後のj「若きをのこども」の「声細やかにて、面瘦せにたる」の「細やかに」と対応し、切ない恋に悩む女のはかなげな様を表わすとされる俗謡の歌詞⁵⁾の心象を視覚的にも聴覚的にも印象づけている。g「月はいと細くて」の「細」の表現上の必然性はここに存し、その歌を聴いて道綱母は帰路で初めてk「つぶつぶと涙ぞ落つる」のであって、細い月は情感の高まりを導く景物として表わされている。

四角で囲ったように、ここには月光による光景が「見る」・「見ゆ」を多用して綴られる。『蜻蛉日記』の物語でにおける「見る」ことについては、自己を見つめ直す意味があり「蜻蛉日記の物語は、夢をも含めて、本質的に「見る」ことを求める旅」だとの的確な解釈が提出されている⁶⁾。当該部分で、細い月が照らす寺からの帰路の景を「見」と繰り返して書くことは、何を示唆しているだろうか。聖的で幻想的な時空としての景を「見」ることに執しているのだが、引用部の最後には波線部「見えぬ」と書かれて、1「遙かなる楫の音して、心細くうたひ来る舟あり」と聴覚で確認される箇所が現れ、それが自邸からの迎えであることに留意したい。京からの使者は月光によつては認知されない非聖のものなのである。そしてこの後には月の光で「見」ることは叙されなくなる。細月の光に照らされた感傷的な風景は京の現実によつて掻き消され、続いて「瀬田の橋のもとゆきかかるほどにぞ、ほのぼのと明けゆく」と、都への入り口で日光の世界に移る。以降は道のりも述べず、自邸に到着したことが略述される。

石山詣での帰途において有明の細月は朝日が差し初めるまでのわずかな時を照らし、彼女は月光のもと靈気に満ちた空間を眺め続けた。それはまもなく訪れる避け得ない朝、すなわち京の過酷な日常から目を背けるつかの間の非現実的な時空間であつて、京の自宅からの迎えに会ったときに消えるのだった。夜と朝の狭間に上る月末の細月を目にするのは、夜明け前に起きていて外を眺めた時であり、非日常的な情景として感受されたことは考えやすい。『蜻蛉日記』では、寺と自邸との狭間でもあるこの暁まえのひとときに、細月が現実から離れた幻想的な時空間をつかの間現出させており、煩雑なほどの「見」るは彼女がそれを愛惜すべき景としてとらえ綴ったことを表す。

三、『枕草子』・『更級日記』における月末の細月

『枕草子』には入り日と組み合わせる月末の細月について書かれる。

Ⅱ 日は 入り果てぬる山の端に、光なほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。

(二三四段・三七〇頁)

月は 有明の、東の山ぎはに細くて出づるほど、いとあはれなり。

(二三五段・三七二頁)

この「日」と「月」の景は対応し、それぞれ「山の端」・「山ぎは」と、山のシルエットを活かして日没後と月の出時というわずかな時間の繊細な光の美を描く。この「月」は「日出後の月の出といえは、三日月の頃であろう」とも説明されるが、月初めの三日の月とは反転した形で「東の山ぎはに」「細く」明け方直前に上る月末の月である。未明に「山ぎは」から現れる様は、月の光と動きの変化をダイナミックに感受させる。『紫式部日記』にも「をかしき夕月夜、ゆゑある有明」と見えて、細い月とはしないものの、夕方の月とともに有明の月という、弱い日の光を受けてのかそけき月光を愛でており、十一世紀初頭までに散文作品において共有され描出されていた美意識だった。

『枕草子』にはもう一例、月末の細月が認められる。

Ⅲ 十二月^a二十四日、宮の御仏名の半夜の導師聞きて出づる人は、^b夜中ばかりも過ぎにけむかし。

日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそ、むらむら白き所がちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面隠しして、^c有明の月の隈なきに、いみじうをかし。^d白銀などを葺きたるやうなるに、^e水晶の滝など言はましやうにて、長く短く、ことさらにかけわたしたると見えて、言ふにもあまりてめでたきに^f下簾もかけぬ車の、簾をいと高う上げたれば、^g奥までさし入りたる月に、薄色、白き、紅梅など、七つ八つばかり着たる上に、濃き衣のいとあざやかなるつやなど、^h月に映えてをかしう見ゆるかたはらに、葡萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣のいと白き紐を解きたれば、ぬぎ垂れられていみじうこぼれ出でたり。指貫の片つ方は、とじきみのもとに踏

み出だしたるなど、ⁱ道に人会ひたらば、^jをかしと見つべし。^k月の影のはしたなさに、^lうしろざまにすべり入るを、常に引き寄せ、^mあらはになされてわぶるもをかし。ⁿ「凜々として氷鋪けり」といふことを、かへすがへす誦して^oおはするは、^pいみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近うなるも、くちをし。
(二二八三段・四三六頁)

最初の文において「人」は「人」・「けむかし」と三人称で推量表現を用い、物語的なつくりを示している。

「御仏名」は十二月下旬頃、宮中また諸国(国庁)・院・宮々・諸寺で行われた、その年の罪障を懺悔して祓う仏事である。現在の太陽暦では一月末頃あたり、雪の降ることが多かった。『拾遺和歌集』所収の紀貫之歌「年の内に積もれる罪はかきくらし降る白雪とともに消えなん」(冬・二五八「延喜御時の屏風に」／『拾遺抄』一六〇)は現存するもつとも早い仏名の歌で、後世に影響を与えた。雪は積もる罪を象徴しまた罪障を清めるとして仏名に関係づけられ、『枕草子』九四段「くちをしきもの」には「御仏名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる」とある。

a 「二十四日」の月は半月よりも欠けた細い月、月の出は深夜一時頃で「半夜」が終わる午前一時から二時頃と重なり、またb 「夜中ばかりも過ぎにけむかし」¹とも合致する。それが雪の景をc 「隈な」く照らし、d 「白銀」・e 「水晶」²と冷鋭で装飾的な情景が表される。そこにf 「下簾もかけぬ車の、簾をいと高う上げたれば」という尋常ならざる牛車を描き、この光景を車中から眺める人の様を読者に想像させるのであり、これも物語的だ。この月齢だと夜中過ぎでもまだ低い位置の月なので、光が牛車のg 「奥までさし入り」、読者は月光に照らされた車中の人の装束をのぞき見するようにイメージする。その女性の衣装はh 「月に映えて」ともされて、月光を受けていることが強調される。『蜻蛉日記』上巻初瀬詣で(安和元年九月)の往路には、「簾巻きあげて、下簾おし挟みて見れば」と眺め出した時に、夕日が斜めに車中に入ってきて自分の装束が美しく照らされた様について、「着なやしたる、ものの色もあらぬやうに見ゆ。薄色なる薄物の裳をひきかくれば、腰などちがひて、こがれたる朽葉に合ひたるこちも、いとをかしうおほゆ」との似た情景が見える。簾をあげた牛車に低い角度で差し入る日光あるいは月光に照らされることによって、衣装は特別な色調を感じさせたのだった。『枕草子』のこの月は鄭順粉氏によって、外界的な景物として照明のように照らし情景を鮮明に映像化していると指摘されており、賛同される。

i では「会」う人がいたら「をかし」と感じるだろうが誰もいないと叙しつつ、この情景を描きまたイメージする作者また読者はそれを「をかし」と感受しているという、含みのある表現になっている。j 「月の影のはしたなさに」と、女は自分を照らす月光に恥じて退

こうとするが、男は女を引き寄せ、女はk「あらはになされてわぶる」のであり、車中の男女の親密な様子が示される。ここで女の困惑を「をかし」と記しており、作者はこの女の立場にはいない。『集成』はnの「夜一夜」以降について、「突然、自身の体験として、主観的な感想を述べた」とし、自らの経験を昇華して回想的な随想にしたためたと解する¹⁴。確かにここでは「まほしきに」・「くちをし」と車中の女の感情に作者を重ねた書き方がなされ、またこののみ男にm「おはするは」と敬語表現を用いて現実的な人間関係の意識を顕現させている。これに続くn「いみじうをかしうて」も主観的な口吻と読めてくる。しかしこれらは最後のまよめ文における限定的な表現であり、作者清少納言の位置は明確にされないままなので、作者の経験に拠るとは決めがたい。物語的に描出してきた特異な条を、この書き物の記事のひとつとして組み込むための表現方法と解するのが妥当だろう。実見した有明の細月の印象的な美を契機に構成された虚構的な記事と考えられる。1「凜々として氷鋪けり」は『和漢朗詠集』(二四〇)の一節で、この月光の情景において聞こえる人の声を漢詩句だけとした趣向も非日常的・浪漫的なものである。またここでは月の推移や日の出には触れずに、n「行く所の近うなる」と男女の移動によって相対的に時間の動きが示されて、この幻想空間は作品上に愛惜されるように留められたまま閉じられる。有明月は一般に恋人との別れを惜しむ景物だが、ここでは幻想的な道行きの時が終わり近いことを登場人物も作者も惜しむのである。

仏名会は年末であり冬の終わりが近く、ここでは夜の終わりの間近であって、時の推移を意識せざるを得ない時だ。この月末月は、御仏名で穢れを祓った男女の乗る牛車が近づき去る場面を、暁までのつかの間の幻想的空間として現出させる景物となっている。

『更級日記』に見出せた月末の細月も仏名の記事だ。

IV 十二月^a二十五日、宮の御仏名に、^b 召しあればその夜ばかりと思ひて参りぬ。白き衣どもに、濃き搔練をみな着て、四十余人ばかり出でゐたり。しるべしいでし人のかげにかくれて、あるが中にうちほのめいて、^c 暁にはまかづ。^d 雪うち降りつつ、^e いみじくはげしく、さえ凍る暁がたの月の、^f ほのかに濃き搔練の袖にうつれるも、^g げに濡るる顔なり。道すがら、

年はくれ夜はあけがたの月影の袖にうつれるほどぞはかなき

かうたち出でぬとならば、さても宮仕への方にもたち馴れ、世にまぎれたるも、ねぢけがましきおほえもなきほどは、おのづから人のやうにもおほしもてなさせたまふやうもあらまし。^h 親たちも、いと心得ず、ほどもなくこめ据ゑつ。さりとして、その有様の、たちまちにきらきらしき勢ひなどあんべいやうもなく、ⁱ いとよしなかりけるすずる心にも、ことのほかに違ひぬる有様なりかし。

幾ちたび水の田芹をつみしかは思ひしことのつゆもかなはぬ
とばかりひとりごたれてやみぬ。

(三二八頁)

a 「二十五日」は細い月、月の出はおおよそ午前二時三十分である。⁽¹⁶⁾ c 「暁にはまかづ」の後の e 「暁がたの月」で、こども d 「雪」景だ。「雪うち降りつつ」の中の「月」には虚構性がある。⁽¹⁷⁾ また、e 「いみじくはげしく」と激烈でありながら「さえ凍る」⁽¹⁸⁾ 「月」とし、その未明の月が f 「ほのかに濃き搔練の袖にうつ」と衣の鮮やかな暖色やそれが想起させる纏う人の体温をも表して、多彩な美的景物のぶつかり合う非現実的な描写になっている。冬の細月に斜めに照らされる装束を描くのは本文Ⅲと重なり、自分の衣を凝視して「あひにあひて物思ふころのわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる」(『古今和歌集』恋歌五・七五六・伊勢／『後撰和歌集』一二七〇・第三句「わが袖は」)を想起し、恋に泣き濡れるこの歌の情緒に g 「げに」と共感する。

当該部については、『源氏物語』「須磨」巻の花散里との別れの条で「明け方近うなりにけり」の頃、「例の、月の入り果つるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば」に続き、花散里の歌「月影の宿れる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光を」とある場面⁽²⁾ (一七五頁)を、当該部は伊勢の引歌ごと取り込み「自己を二重に象徴化する」との指摘が存する。⁽¹⁹⁾ また、年末の寒々しい景物が加わることでそれとは違った表現世界をここでは創出しえているとも解釈されている。⁽²⁰⁾ これらの先行研究に拠りつつ稿者は、花散里の条においては「いたう更かして」の訪問時に「月おほるにさし出で」という夜中零時前後にのぼり半月より丸みをもつ有明月であるのに対し、『更級日記』の「二十五日」の月は「暁がたの」細い月で「凍る」にふさわしい鋭敏な景物として描かれ、また夜と朝の狭間において間もなく移ろうはかなさを表していることに注意したい。この記事では続く「年はくれ」歌にも関わって、有明の細月であることが有効に機能していると考えられるのだ。

続いて独詠するこの「年はくれ」歌⁽²¹⁾は「年」の移り変わりとして「夜」から「あけがた」への推移を詠じて、「ほどぞはかなき」と結ぶ。伊勢歌また花散里歌の「宿る」はここで「うつれる」に変わる。それは「宿る」よりもかりそめの映像として「うつる」だけなのであって、「年はくれ夜はあけがた」という移ろう時を象徴する細月の光はその「はかな」さを際立たせている。この独詠歌は伊勢歌の恋の気分からは離れると読まれることもあるが、細月の表現と関わってこの歌には伊勢歌につながる恋の情調が込められていると解されるので、以下に述べたい。

四角囲みの箇所「暁」・「暁がた」・「夜はあけがたの月影」によって、未明から朝にかけての月であるとの強調が認められる。b「召し」で「参」った大人数での賑々しい「宮の御仏名」の勤行を終え、c「まかづ」と退出し個人に戻った心の隙間において、夜と朝とのほざま、また年の終わりという移り変わりの時を照らす細月が引き出した感慨が、幻想的な情景として描出されている。続く記事では、h「親たち」によって宮仕えから退かされ、不本意な結婚を強いられて夢破れた現実がiで述べられる。「幾ちたび」歌の「思ひしことにつゆもかなはぬ」は絶望的な心情を直叙する。月末月の条が向き合わざるを得ない現実の直前であることは、本文Iの『蜻蛉日記』の例に近い。娘時代から結婚生活へと状況の変化する場面である当該記事において、移ろう時を細月が象徴しつつ、伊勢と花散里の恋歌を響かせ浪漫的な心象風景を揺曳させながら、「はかな」さを嘆じる「年はくれ」歌を導き出しているのだ。結婚前最後の宮仕えの様相を、美しく景物がさらめくシーンとして構成し、そこに叶わなかった恋の情趣を込め、愛惜の思いをもって表している。恋人との別れを象徴する典型的な「有明月」の発想を下敷きに、伊勢の「あひにあひて」歌の恋の情調を醸し、さらに袖に宿る月を自分の元に留まる光源氏と詠じる花散里歌から幻影の貴公子をイメージさせる。失望の現実直前において、はかなく消えゆかざるを得ない細月と想念のみやびな恋を組み合わせ、惜しむべき浪漫的なひと時を描出したのだった。

暦月や季節そして暦年の終わり間近のこの時、『枕草子』と同じく仏名会後に罪を消滅させる雪の景を照らす細月が表されて、過ぎ去る時における空想的風景が描出された。月末月ははかない幻想的空間を現出させる景物となっている。

四、『とはずがたり』における月末の細月

十四世紀初頭に成立した『とはずがたり』の月末の細月の例は、本文I～IVの細月のあり方を先鋭化し象徴化したものと考えられるので、次にあげる。『とはずがたり』において月は後深草院を暗示し、君主と臣下の主従関係を示唆する属性を帯びているという重要な指摘がすでになされている。本稿では有明の細月特有の表現性を指摘したい。

V：…いと弱げに泣かるる程に、^a 更けゆく鐘の声、ただ今聞こゆるほどに、「御幸」と言ふ。いと思はずに、病人も思ひさわぎたり。御車さし寄する音すれば、急ぎ出でたるに、北面の下臈二人、殿上人一人にて、いとやつして入らせたまひたり。^b 二十七日の月、

c ただ今山の端分け出づる光もすごきに、^d われもかう織りたる薄色の御小直衣にて、とりあへずおぼしめしたちたるさまも、いと面だたし。(卷一・二二三頁)

作者二条は母を早くに亡くし父の元で育ちながら、数え四歳で後深草院に引き取られて成長し院の寵人となった。ここは父雅忠の危篤が伝えられ、急ぎ実家に戻ったところ。引用文の直前に「七月も末になるに、二十七日の夜にや」とあり、この日の月の出は午前二時半頃だ。²⁴ また「月なきころなれば」とも書かれ、a「更けゆく鐘の音、ただ今聞こゆるほどに」と月の出前の闇中で聴覚が働いている。彼女を追うように後深草院が俄に訪れ、そこでb「二十七日の月」と日付が繰り返され強調されて、cで月の出が述べられる。たいへん細く鋭い形のこの月は「ただ今」と現在性をもって書かれる。今ちょうど山陰から姿を現して光を発したこの細月と後深草院とが重ねられ、幻想的でドラマチックな景が描出される。

細月が「山の端」から現れる様は、本文Ⅱ『枕草子』の「月は 有明の、東の山ぎはに細くて出づるほど」の美意識とつながり、父が危篤のこの場面では世の無常を表す歌語「山の端の月」²⁵としても機能している。「光もすごきに」と月の超常的な光が述べられ、d「われもかう織りたる薄色の御小直衣にて」と月光に照らされた装束をもって院の存在が示され、聖性がまことされる。渡部泰明氏が『千載和歌集』の考察で、「月は王威の象徴となつて、下命者後白河院を莊嚴する」と、勅撰集において天皇の威光を表すくまなく照らす月を論じており、興味深い。勅撰集では満ちた月に意味が存するのだが、『とはすがたり』というこの日記文学作品においてはごく細い月と後深草院とを重ね合せていること、そして父の死間際の凄切で夢幻的な表現世界がつけられていることに注意したい。

特別な恩寵を父と自分に与える聖なる存在として後深草院を表し、この後「明け過ぐるほど」の月の見えなくなった朝に院は帰ると叙す。未明の細月の時間のみ院は特別に姿を見せたことになる。そしてこの後に院から届いた和歌「このたびは憂き世のほかにくぐりあはむ待つ暁の有明の空」は危篤の雅忠にあの世への引導を渡すもので、先の細い月が「有明」月となり、「憂き世」とあの世との狭間の景物として詠じられるのである。

以上、月末の月は日記文学作品に散見されたが、それは、先行文学における有明月の影響を受けながら、実際に夜明け近くに細月と向き合った印象的な体験が描出の動機になったことが考えられる。日常生活時間とは異なる夜明け直前にひとり眺めた細月は、独特の情動を誘発したことが看取される。

『蜻蛉日記』の細月に照らされた清らかな湖上の道程、『枕草子』・『更級日記』の仏名後における月光下の非現実的で美しい情景、そして中世の『とはすがたり』では有明月の光を背景として院の存在が幻想的・象徴的に描かれた。細月の光が衣を照らす表現が散見され（本文Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）、その衣は常と違う美しさを示し、その人物は非日常的な存在として表れる。また、湖面を照らす月光や雪中の月など、視覚的に豊かな表現が凝らされていることも指摘したい。

五、漢詩文における月末の細月

続いて和歌の用例を検討する前に、漢詩文における月末の細月について目配りしておきたい。『本朝文粹』・『千載佳句』・『和漢朗詠集』によって概観する。

『本朝文粹』には「織月賦」(一)があり、「織月」の語は「有明月」をも表すが、「彼新月」・「光未_レ舒」と叙されるので、ここでは月初の月だ。漢詩句アンソロジー『千載佳句』に「三日月」の語は存するが、月末の細月と認定できる用例は見えなかった。『和漢朗詠集』には月末の細月と認められる一例が存した。「妓女」(七二二)の「双鬢且理春雲軟 片黛纔生暁月織」は「月織」によって細い月、また「暁」によって月末なのが分かる。化粧をしている舞姫の美しさを、眉と細い月とを重ねる典型的な比喩で表している。

漢詩文享受の分厚い歴史からするとごく一端の調査に過ぎないが、以上のことから、平安貴族が親しんできた漢詩文の世界では、月末の細月の表現は稀だったことがうかがい知れる。⁽²⁷⁾

六、和歌における月末の細月

では、月末の細月と解せる和歌について、管見に入った用例を検討していく。先の漢詩文とは異なって和歌にはいくらかの用例が確認され、日の出直前の細月は和文脈的景物であると言えそうだ。

『万葉集』には有明の細い月を詠じた歌は見出せない。『古今和歌六帖』の「みかづき」の項目には月末月と判断できる用例はなく、「あ

りあげ」の項目では細さを詠じる歌は確認できなかった。

月末の月であることが明らかかな和歌として、早い時期では次の二首をあげることができる。

A 長月の有明の月はありながらはかなく秋は過ぎぬべらなり

(『後撰和歌集』秋下・四四一「九月つごもりに」紀貫之)

B 年暮れて明け行く空をながむれば残れる月の影ぞ恋しき

(『和泉式部集』四九一「師走の晦がたに暁おきて見れば、月入りがたになれば」)

ともに「三日月」・「細し」など細月と分かる語は詠み込まれず、詞書により月末月と理解される歌である。Aは『新大系』に「有明の月」は翌朝も残っているから、明日十月一日になっても残っているわけだが：「の意」と説明されるように理知によって構成された歌で、「有明」と「あ(有)りながら」や、「長」と「はかなく」・「過ぎ」との対応など言葉遊びの要素が強い。Bは年末の感慨のなか、明け行く空に見出したわずかな細月の光をその年最後に認めた景物として詠じる。この二首は、季節や年が過ぎゆく時にまだ空に残っている(「ありながら」・「残れる」) 月末の月という発想によって詠まれている。

この他には十一世紀いっぱいまで用例は見出せない。八代集では時代が下降するにつれて月を詠じたものが増えてくると早くに指摘され、また勅撰集においては『千載集』で「有明の月」が急増するのであって、それにやや先行する『散木奇歌集』以降に月末の細月が見られるとの卑見はそれらと重なる。先述の渡部泰明氏は『千載和歌集』という勅撰集における月の表現を詳細に分析し、十全な月を夢見るあり方を論じて意味深い。本稿では、わずかな時間しか見えない月末の細月の、和歌におけるイメージをとらえることを目途としている。王朝期の美意識を表す十五世紀頃までの和歌の用例を、分類しつつ和歌の成立順に記す。

A・Bのように、季節や暦年の最後に残る月の用例が見出せる。

C 暮れて行く秋のなごりをかぞふれば有明の空に三日月の影

(『拾玉集』三八一「暮秋」)

D 春もはやあはれいくよに有明の月影細きよこ雲の空

(『延文百首』一一二〇・進子内親王)

E 秋ふかき細江の月の眉の霜水の鏡にふりてさむけき

(『草根集』四一一五「江月冷」)

C 歌は晩秋、秋の名残の景物として薄明の払暁における細月の光をとらえ、それを惜しみつつ見送る寂然とした情感が詠われる。A 歌と同じテーマだが、こちらでは「三日月の影」も「秋のなごり」のうちのひとつとしてあり、この光もまもなく移ろうと感ぜられている。

D歌は暮春、細い月光に懸かるように漂う柔らかな「よこ雲」が時の推移と惜春の情を繊細に表す。この歌でも「有明の月影」は「あはれいくよ」と移ろう春の景物のひとつだ。E歌は晩秋、「細」い「月の眉」との比喩、「月の」「霜」、また「水の鏡」と、漢籍の発想を軸に虚構的・幻想的時空を構築している。

これら季節最後の月は秋や春の終盤で、欠け尽きようとするとする月末月と重なりつつ、情趣ある景を夜の終わりとともに惜しむ。「月影」の語については、三代集のあたりでは明るさの強調だが『千載和歌集・『新古今和歌集』の頃は詩的世界を形成するシンボルとなり幽玄・妖艶のムードを作り出すと説明されている。⁽³²⁾ 右の検討は大枠ではそれに一致するが、月末の細月の光については、三代集頃には季節が移る時も残っている月光と詠われたのに対し、中世になるとC・Dのように季節とともに移ろわざるを得ない月の光とされ、一首全体としてはかなく繊細な情景が表されると認められる。

また、有明の細い月は、それと対照の形となる月初の三日月と関連づけて詠まれることがあった。⁽³³⁾

F宵のまのながめほどなき三日月を又ほのめかす有明の空

〔『正治後度百首』五三五「月」源家長〕

G三か月の影とひとつにみし珠はおなじ波間に有明のそら

〔『百詠和歌』三四「珠含明月暉」海中におほきなる蚌蛤あり、なかに明珠あり、月とともに虧盈つ、月の望にはなかにみあり、月のつごもりにはなかもなし、明月の珠これなり、蚌蛤珠といへり〕

H影見えし夕日がくれの三日月は明行く空の今朝の有明

〔『他阿上人集』七〇四「秋」〕

F歌は、夕方の「三日月」の残像が日の出直前の「有明」の細月によって一瞬重なって感受されたと詠う。G歌では、月と珠との満ち欠けの重ね合わせと海と空との空間のつながりが、漢籍故事に拠って幻想的に表される。「は」によってふたつの時空がつながれている。H歌では「夕日」・「明行く」で日没・日の出を組み合わせ、ともにかそげく細い月の光を詠って、これも「は」で両方の景を同質に表す非現実的な結びつきを示している。三日月と有明の三日月を重ねたこれらの歌は、かつての月初の三日月と今の月末の細月それぞれのつかの間の現れをワープするようにつないで、幻想的な表現世界を現出させている。

その他には次のような和歌が見出せる。⁽³⁴⁾

I たちのぼる有明の月を人しれず心細さの友とみるかな

〔散木奇歌集〕五四〇「長月の二十日余りの月の暁がたに細くかすかに見えればよめる」
 (〔新拾遺和歌集〕秋歌下・四四五・寂連)

J野辺はみな思ひしよりもうら枯れて雲まに細き有明の月
 (〔為尹千首〕三八二「野鹿」)

K有明の月の細道ほのほのと小野よりいづるさをしかの声
 (〔松下集〕一九九「戸外春風」)

L明けゆくか有明の月の細くかく遠山眉をみだす横雲
 (〔草根集〕九四二九「暁山」／〔正徹千首〕八一〇・結句「みだれ横雲」)

M霞ひく月の眉ずみ朝戸出におとすかはるる春の山風
 (〔松下集〕一九九「戸外春風」)

I歌は、夜明け近くに「細くかすか」な月を「心細さの友」として慰めを得ており、暗闇に上がりゆくかそけき月への心寄せがある。J歌では、雲間の細い「有明の月」が荒涼とした秋枯れの景を現出させている。K歌は「ほのほのと」した月の光と「ほのほのと」聞こえてくる鹿の声が響き合い、和歌に典型的な切ない恋の象徴的景がつくられている。「細」月と「細道」とで天地がわずかにつながり、また「声」で示される鹿が「ほのほの」「いづる」によって姿をあらわしそうな幻想的な空間となっている。L歌は「細い」「眉」が女性を示唆し、「みだす」は逢瀬を暗示する表現であり、有明の別れの風情がある。「眉をみだす横雲」によって「明けゆくか」と感受されたという浪漫的な表現構成である。M歌も「月の眉」として女性を匂わせ、朝になって眉墨を落としたように月はもうないと、細月の時の短さが詠われる。物語的な余韻が漂う。

闇や暁方を照らす月末の細月はつかの間の浪漫的・幻想的な景を現出させ、また詠者の孤独な心情を投影している。漢詩文の発想や比喩などによる豊かな物象イメージや、「雲ま」・「横雲^⑤」という繊細に移ろう景物の重ね合わせなど、細月が照らす景には視覚的に印象に残る表現が編まれている。また、「有明月」は恋人との別れやせつない恋を投影し象徴する景物として多彩に詠まれ続けたが、明け方近い闇夜に上がる有明の細月では、そのような恋人との別れや不在のつらさが詠まれることはまれで、非日常的な時空間において孤独に月を見るありようが詠じられた。この細月は勅撰集の世界にはほとんど選ばれなかつた景物と言いうるのであり、個人を照らし個の心情と響き合って、つかの間の幻想的な景を現出させたのだった。

七、幻想の時の表現

月末の細月は女流日記文学において聖性や浪漫性を帯びた景として描かれ、はかないその時空間を惜しむ心情が表現されていた。それは恋人や仲間とではなくひとり感受する景としてある。『蜻蛉日記』では参詣後のしめやかな空間を描出し、近づきつつある京の現実からの逃避的な時空を構成する。『枕草子』においては情趣に満ちた物語的世界を叙し、『更級日記』も余儀なく過ぎる独身時代最後の時を非現実的・浪漫的に描いた。中世の『とはすがたり』で細月は危篤の父を見舞う後深草院に重なる象徴的な景物だった。後深草院の聖性を示すが、満ちた月の威光ではなく細月であることによって、死の時につながる不吉さをも込めた夢幻的な時空間が表出されている。

和歌の世界では十二世紀に入って月末の三日月の用例が散見されるようになる。過ぎゆく季節とともに移ろう細月として惜しみ、また月初の三日月の景を重ねてそこからの時間の推移や今の時はかなさを示した。現実から遊離したつかの間の幻想的な美を、愛惜の情をもって豊かな視覚的表現であらわしており、検討してきた散文文学作品の描写に重なるところがある。

月末の細月は、有明の月一般とは異なる情調をもたらしていたことが認められた。月末の未明のわずかな時しか見えず、細く印象的な形のこの細月は、王朝文学において時の推移を表象し非現実的な情景を現出させている。⁽²⁾人々は未明の孤独感と移ろう時への愛惜の情のなかで、細月の照らす景に幻想的世界を垣間見たのだった。

※『蜻蛉日記』・『枕草子』・『源氏物語』・『紫式部日記』・『更級日記』・『とはすがたり』・『和漢朗詠集』は『新編日本古典文学全集』に、『本朝文粹』は『新日本古典文学大系』に拠った。和歌は『新編国歌大観』(Web版)に拠っている。表記を私に改めたところがある。

注

(1) 三角洋一校注『新日本古典文学大系』とはすがたり 脚注(一九九四年、岩波書店)。

(2) 現実に付いた読みとしては、鳴滝籠り(天禄二年六月)では月経時に寺に居ることが憚られており(『落窪物語』「卷一」)にも、あこぎが月経期間に入った

と偽って石山詣でを断る場面がある)、一般的な月経周期は月の満ち欠け周期とほぼ等しく二十九日位であるため、唐崎被えを実行した翌月の同じ頃に石山寺へ詣でたと考えることは月経期の回避となつて妥当性がある。

(3) 山田昭全「月輪観と中世和歌」『山田昭全著作集 第三卷 釈教歌の展開』(二〇一二年、おうふう)は、平安前期には月輪観という禪観が確立しており、平安末期には西行・慈円の歌に月輪観を実践した詠が認められると述べる。

(4) 例えば勅撰集においては三代集に例はなく、『後拾遺和歌集』の「月影のかたぶくままに池水を西へなると思ひけるかな」(雑一・八三六「池上月を詠める」良暹)にはその可能性がある。

(5) 秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解 四十九」(『国文学解釈と鑑賞』一九六六年五月)に「こゑ細やか」と「面瘡せ」とは対句をなして、全体が歌謡の文句なのであろう」と解説される。

(6) 三田村雅子「蜻蛉日記の物語」(『一冊の講座 蜻蛉日記』一九九二年再版、有精堂出版(一九八一年初版))。

(7) 能因本にはそれぞれ「山際」・「山の端」とある(根来司「新校本枕草子」(一九九一年、笠間書院)による。注(11)も)。この異同は本稿の論旨にはかかわらない。

(8) 萩谷朴校注『新潮日本古典集成 枕草子』頭注(一九七七年、新潮社)。

(9) 竹居明男「日本における仏名会の盛行」(牧田諦亮監・落合俊典編『七寺古逸経典研究叢書 第三卷 中国撰述経典(其之三)』一九九五年、大東出版社)。

(10) 『江家次第』「卷第十一 御仏名」(『増訂故実叢書』)には、「半夜」の時間を、第二夜は子二刻から丑一刻まで、第三夜は子三刻から丑二刻とする。

(11) 能因本にはこの後に、「里へもいで、もしは忍びたる所へも夜のほどいづるにもあれ、あひ乗りたる道のほどこそをかしけれ」の一文が存し、状況説明を加えている。

(12) 『枕草子』には「月のいと明かきに、川をわたれば、牛の歩むままに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ」(二二六段)など、同じく水晶を月光の比喩として非現実的な美を表現する例が見える。本稿では当該例が細月であることに注視している。

(13) 鄭順粉「枕草子の自然の表現方法」『枕草子 表現の方法』(二〇〇二年、勉誠出版)。

(14) 注(8)に同じ。

(15) 『更級日記』の春秋優劣の条の最後に「またの年の八月に」「細殿の遣戸を押しあけて見出だしたれば、暁がたの月の、あるかなきかにをかしき」とある。

御物本傍注によれば「両宮入内」していた七月二十三日から「両宮御退出」の八月十日の間で、「その夜さり、まかでにしかば」を重視すると八月九日とナリ有明月でもなく、『新編全集』も指摘するように不合理である。「細い月」と確定もできないため検討から除外した。

- (16) 長暦三年(一〇三九)閏十二月二十五日の記事であり、この日を太陽暦に変換し(一〇四〇年二月十日)、インターネットサイト「お星様とコンピュータ」<http://stars.jp>の「出没南中時刻」によって調べて、この日の月の出時刻は午前二時二十五分(京都)と認めた。

- (17) 小谷野純「更級日記全評釈」(一九九六年、風間書房)では、先の本文Ⅲ「枕草子」や「弁内侍日記」の仏名会における月の描写にも触れて、ここを「実景を超える表象」と論じており、同意される。

- (18) 丹羽博之「月水攷——影見し水ぞまづ水りける」の展開——(藤岡忠美編『古今和歌集連環』一九八九年、和泉書院)に、「平安中期から冬の夜の月は、美なるものとして次第に人人の意識に上っていく」のであり、『枕草子』・『更級日記』にも見られた「月」と「水(凍る)」の連想は漢詩の影響を受けつつ一条朝前後に詠まれ始める、との有益な指摘がなされている。

- (19) 西田友美「更級日記の表現と方法——源氏物語引用をめぐって——」(『国語と国文学』一九九四年一〇月)。

- (20) 福家俊幸『日本古典評釈・全注釈叢書 更級日記全注釈』(二〇一五年、角川学芸出版)。

- (21) ここで孝標女が仏名を契機に歌を詠出したのは、『更級日記』の記事の最終年康平二年(一〇五九)頃から間もなく後の「裸子内親王家歌合」(『治暦四年(一〇六八)十二月廿三日庚申』)で「仏名」が初めて歌題となる(一七二〇)当時の文芸状況との関わりも考えられる。

- (22) 西川照美「更級日記——月をめぐる構想——」(『国語国文学研究』一九九〇年九月)は「宮仕えにおける心細くかりそめ的な作者の立場を象徴する」「悲哀に満ちた存在」としてこの歌の「月影」を述べる。

- (23) 阿部真弓「『とはずがたり』におけるメタファーとしての月影——後深草院をめぐる——」(鳥津忠夫他編『とはずがたりの諸問題』一九九六年、和泉書院)。
(24) 文永九年(一二七二)七月二十七日の記事であり、新暦変換(一二七二年八月二十二日)して、注(16)と同じく調べたところ、この日の月の出時刻は午前二時三十七分(京都)だった。

- (25) 『和泉式部集』(一五〇「播磨の聖のおもとに、結縁のために聞えし」／八三四「播磨の聖のもとに」)の「冥きより冥き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」が有名である。山折哲雄『増補新訂 日本宗教文化の構造と祖型』(一九九五年、青土社(一九八〇年初版))の「山越えの象徴」・「月イメージの変貌」に、山の端にかかる月が西方浄土観と密接に関わることが論じられている。

- (26) 渡部泰明「千載集の主題——月をめぐって——」『中世和歌の生成』(一九九九年、若草書房)。
- (27) 漢詩文では「以三君明」喩「日月」、皇明燭照」(『本朝文粹』一七八)のように、満月をもって君主の徳などを表わす詩句が散見される。
- (28) 片桐洋一校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』(一九九〇年、岩波書店)。
- (29) 笠原伸夫「中世の精神」『中世の美学』(一九六七年、桜楓社)。
- (30) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(一九九九年、角川書店)「有明」の項には、そして有明月そのものの美しさは中世に至って突き詰められ深められていったとある。
- (31) 注(26)に同じ。
- (32) 片桐洋一「歌枕歌ことば辞典 増訂版」『つきかけ【月影】』(一九九九年、笠間書院)。
- (33) 「都をば三日月を見て出でしかど今日是有明のさやの中山」(『忠盛集』九六「羈旅」)など、細月と確認できない有明月の歌は検討からはずした。
- (34) 「めぐりあはんまた有明の三日月のうき世をわけて山にこそいれ」(『言はで忍ぶ』二二六「中納言(右大将)」)は月初めの歌である。「天の戸をおし明け方の月みれば憂き人しもぞ恋しかりける」(『新古今和歌集』恋歌四・二二六〇)は『源氏物語』「賢木」巻や『うたたね』の出家場面に引用される有名な歌だが、細月と読み定めることができない。また「てりかはる紅葉を峰の光にてまつ月細き有明のやま」(『拾遺愚草員外』三七四)は『夫木和歌抄』(八七五六)に第四句「まつ月おそき」と見える。本歌である「入る月にてりかはるべき紅葉さへかねてあらしの山ぞさびしき」(『新千載和歌集』秋歌下・五六七・惟喬親王)『夫木和歌抄』六二七二)や、「てりかはる」歌の影響下に詠まれたと考えられる「しくれゆく雲まの夕日影さして又てりかはる峰の紅葉葉」(『邦高親王御詠』九九「紅葉」)Web版 新編私家集大成」による)の内容から「遅き」が妥当と判断されるので、考察の対象から外した。
- (35) 勅撰和歌集において、「雲ま」の「月」は『金葉和歌集 二度本』が、「横雲」の「月」は『新勅撰和歌集』が初出である。
- (36) 月の特徴的な形について稿者は、「王朝文学における七日の月考」『源氏物語』を中心に」(『平安朝文学研究』復刊第二十八号、二〇二〇年二月刊行予定)、「王朝文学における月初の三日月考」移ろいと変化の表象」(『国文学研究』第百九十集、二〇二〇年三月刊行予定)においても考察している。